

五月の山小屋にて

清水 光子

うす緑色の、きめこまかい沙のカーテンを張りめぐらしたような撫林なばやし。またそこにわずかに根まわり雪が残っている。光の壺の中にも迷いこんだか？と思ひ、何か酔いしれた感じでロッジに戻つて来た私たちを迎えてくれた若い人に、「この枝、杖にして歩いて、とても助かったの。この次までとつて置いて下さいね」と一メートル程の枯枝を渡しま

した。彼は「ええ、いいですよ。たしかに預かっておきます」と答えたのです。そのときの何と自然で気さくで、明るい態度！清々すがしい雰囲気と輝く澄

んだ瞳にすっかり魅せられてしまいました。このロッジに手伝いに来ているアルバイト学生かしら、それにしても何という明るい若者だろう！ちょうどその頃知能の高い若者がいまわしい事件を起していたこともあり、何かしら救われたような思いをいたしました。

次の日、そのロッジでは俳句を楽しむイベントが、有名な俳人の先生の指導で開かれ、私も生まれて始めて始めて「句会」に「何ておっちょこちょいな！」と我ながらあきれ乍ら参加したのでした。苦吟のあ

げく、提出した俳句を選考、指導していただく集まりの前に、国立〇〇大学大学院学生が、この辺に住む「ヒヤマネズミ」の生態の研究をしているのでコーヒーブレイクのようなときその研究の一端を話して貰うことになったのでした。その学生が、何と、きのう、杖を預けたあの青年だったのです。メモや写真をかかえて、老若男女三十余名の前にやや恥かしげに立たれたときの驚き―そしてああ、さすが！と感じました。イエネズミより小さく、ハムスターより少し大きく野生的な桃色がかったかわいいネズミがその単に柄の実を運びこみ、長い冬の間雪の下で生きる姿を、むしろ淡々と話されました。

俳句の先生始め、三十余名の参加者は皆一様にきき入り感動しました。それはヒヤマネズミの生態の話が面白かったのももとより、話し手の、いかにも自然な、謙虚な態度を通して、自然の中に（地球という星の中に）生きているものに対する限りないとおしみと、自然それ自身に対してのおそれ、敬

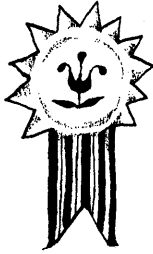
仰の気もちを含め、なおかつ小さきもの、幼いものに対する深く厚い優しさが胸にしみ通ってくる思いだったのです。私は何年か前に哲学者のY先生が話された「アイデンティティ・クライシス」ということばがひふいと浮んできました。

「ここには豊かな自然があります」「自然を満喫しましょう」などという観光旅行の案内があふれ、連休などにはどっとお客がつかめる。そこまでは飛行機、自動車、新幹線など文明を誇る機器で、より速く、より快適にを競って……。自然を満喫などこもかしこも画餅にすぎない現実のようです。これが豊かさの現実とは？ 数千年前文明を誇った、そして忽然と姿を消した砂漠の中の遺跡が我々に教えるものが今、改めて思われます。

真の豊かさとは何でしょうか。豊かな自然環境を二十一世紀をなう子ども達に残すとはどうすればよいのでしょうか。好奇心一ぱいの、輝いた瞳をもつ

子ども達を念じて……。

今を盛りの草や木の花々、やがて実をむすび、動物達の餌、食物になる。地に落ちて新しい命になるのはごく僅かでしょう。勿体ないような自然のいなみとそのめぐり。子ども達の、あの没頭している遊びは、将来をめざしてではなく、遊びそのものが生活なのだ、そのさながらの生活が遊びなのだと倉橋惣三先生は言われました。その中で自ら育つものを育てようとするのが幼児教育の真心ではないでしょうか。ホモ・サピエンスとは遊ぶものという



みがあるように生きています。自然のいなみの、何とバランスのとれたゆったりしたあり方なこと！忙しいとは心がないのだと字が語っています。何もかもきっちり計画され無駄を一切なくした文明都市モヘンジョダロの消え去った謎はこんな所にかぎがあるのでは、と言われます。

六月に再び訪れたロッジの玄関で、彼の青年が「はい、この杖」と、五月の時より少し日焼けした顔で渡してくれました。宝物のように受け取りました。そして、そのあと、あのネズミ達を大切にいてねいに山の厚い腐葉土のしとねに戻してやっている彼の姿に、又しても胸を熱くしたことでした。なお、その日、久し振りにほととぎすの声をききました。

さやかに鳴きわたるかなほととぎす

なれや五月の光なるらむ (藤原俊成)

を思い出しました。幸せな思い一杯になって。

(音羽幼稚園)